

修士論文

中等教育における批判的思考に焦点化したニュースリテラシー学習の開発

Developing News Literacy Learning Focused on Critical Thinking in Secondary Education

社会文化科学部 前期博士課程 教授システム学専攻

232-G8814

河居貴司

主指導：江川良裕 准教授

副指導：喜多敏博 教授

副指導：合田美子 教授

2025年1月

要旨

本研究では、中等教育を対象に、ニュースリテラシー学習を通じて批判的思考を育成するプログラムを開発する。

インターネットやSNSの普及が進む現代社会において、生徒たちには膨大な情報の中から信頼性の高い情報を選び取り、適切に活用する能力が求められている。このような能力を支える「批判的思考（クリティカル・シンキング）」は、情報を多角的な視点で吟味し、合理的な判断を下すために不可欠なスキルであり、国際的な教育プロジェクトでも21世紀スキルとして重視されている。

一方、学校現場においては、新聞を教材として活用する「NIE（Newspaper in Education、教育に新聞を）」の取り組みが行われてきたが、批判的思考を明確なプロセスや要素として学習に取り入れる実践例は少なく、多くの情報の中からニュースを抽出し、その背景や目的、バイアスを掘り下げて考察する活動は未開拓の領域が多い。さらに、新聞の発行部数の減少やデジタルニュースの普及を背景に、従来型の新聞活用教育では対応しきれない課題も浮かび上がっている。

こうした現状を踏まえ、本研究ではデジタルニュースを題材に、情報の信頼性を検証し、背景や意図を分析するプロセスを通じて、生徒が批判的思考を養う学習プログラムを設計する。これにより、現代の情報社会に即したニュースリテラシー教育の新たな実践モデルを提供することを目的とする。

abstract

This study aims to develop a program to foster critical thinking through news literacy learning for secondary education.

In today's society, where the Internet and social networking services are becoming increasingly popular, students are expected to have the ability to select reliable information from a vast amount of information and use it appropriately. Critical thinking, which supports this ability, is an essential skill for examining information from multiple perspectives and making rational decisions, and is being emphasized as a 21st century skill in international educational projects.

On the other hand, in the school setting, "NIE (Newspaper in Education)" has been implemented to utilize newspapers as teaching materials, but there are few examples of incorporating critical thinking into learning as a clear process or element, and there are many examples of students extracting news from a large amount of information and delving into its background, purpose, and biases. However, there are many unexplored areas for activities that delve into the background, purpose, and biases of news stories by extracting news from a large amount of information. Furthermore, with the decline in newspaper circulation and the spread of digital news, there are issues that cannot be addressed by conventional newspaper education.

In light of these current conditions, this study will design a learning program that uses digital news as its subject matter to help students develop critical thinking through the process of verifying the reliability of information and analyzing its background and intent. By doing so, we aim to provide a new practical model for news literacy education in line with today's information society.

第1章 研究の概要

- 1. 1 本研究の背景
- 1. 2 本研究の目的
- 1. 3 本論文の構成

第2章 先行研究と本研究の基本方向

- 2. 1 理論的側面の先行研究レビュー
 - 2. 1. 1 メディアリテラシー
 - 2. 1. 2 批判的思考
 - 2. 1. 3 ニュースリテラシー
- 2. 2 実践領域の先行研究レビュー
 - 2. 2. 1 比べ読みの実践
 - 2. 2. 2 リテラシー育成の取り組み
 - 2. 2. 3 批判的思考の育成ツール
 - 2. 2. 4 海外の事例
- 2. 3 本研究の基本方向

第3章 学習プログラムの設計と開発

- 3. 1 学習プログラムの設計
 - 3. 1. 1 学習プログラムの概要
 - 3. 1. 2 編集のプロセスと批判的思考
 - 3. 1. 3 学習活動の目標
 - 3. 1. 4 学習活動の構成
 - 3. 1. 5 学習活動における評価の観点と方法
- 3. 2 学習プログラムの開発
 - 3. 2. 1 1時間目：ニュースを読み解くスキルを学ぶ
 - 3. 2. 2 2時間目：記事を多角的に分析する
 - 3. 2. 3 3時間目：批判的議論と結論形成
 - 3. 2. 4 4時間目：特集ページの作成とプレゼンテーション
 - 3. 2. 5 教材と準備物

第4章 形成的評価と改善

4. 1 内容領域専門家レビュー

4. 2 インストラクショナル・デザイン専門家レビュー

4. 3 ユーザー評価

4. 4 形成的評価と改善

第5章 結果と考察

5. 1 考察

5. 2 今後の課題と展望

謝辞

参考文献

第1章 研究の概要

1. 1 本研究の背景

現行の中学校及び高等学校学習指導要領（2017、2018）では、「情報活用能力」を「学習の基盤となる資質・能力」として位置付けている。この能力は、情報を整理・比較し、得られた情報を効果的に発信する力を含み、広義の「メディアリテラシー」に含まれる。

近年指摘されるフェイクニュースの増加は社会全体に深刻な影響を及ぼしており、教育現場でも情報リテラシー教育の重要性が高まっている。例えば、耳塚（2020）は、2016年のアメリカ大統領選を機に「フェイクニュース」の拡散が社会問題化したとし、「オンラインの有害な情報に対する懸念が高まり、メディアリテラシー教育にも変化が求められている」と指摘している。

さらに、国際団体ATC21Sプロジェクトは、21世紀に求められるスキルのひとつとして、批判的思考を重視している。不確かな情報が氾濫する現代社会で、生徒たちが情報の真偽を判断し、多角的な視点を養う教育の必要性が高まっている。

一方、ニュースを使った学習を通じて、生徒たちのメディアリテラシー、批判的思考、文章表現などの力を複合的に身につけさせようと、先進的な取り組みを行っている学校現場がある。こうした実践を行っている関西の私立中学校2校の教員らにインタビューを行ったところ、担当教員からは「新聞を使った学習は文章表現力などを育てるうえで有効だと実感している」と学習実践での効果を感じるという回答があった。

教員自作のワークシート学習を週1回行っているという学校では「後日、他者の回答例を紹介しているが、これが学習効果につながっていると感じる」と指摘していた。また、取材、執筆などの体験学習をしているという学校でも担当教員は「着実に生徒の力になっている」と話していた。しかし、教育現場では、学習者に具体的にどのような能力が育成されたかを測定する基準が確立されていないとの指摘もあった。

ニュースを使った学習をめぐるのは、新聞を購読する場合のコストの問題や教師の経験不足、準備の煩雑さといった事情もあって、教材開発が滞る場合もあり、こうした学習法が広がらない理由にもなっているという。

教育現場でのインタビューを通じ、ニュースを使った学習に効果の可能性は感じているものの、学習法としては未確立な部分があるという現状の一端を確認できた。

1. 2 本研究の目的

本研究の目的は、中等教育を対象に、ニュースリテラシーを効果的に学ぶための学習プログラムを設計することである。特に、インターネットやSNSの普及に伴い、信頼できる

情報を見極め、選択するスキルを持つことは重要である。プログラムではニュース記事を題材とした分析活動を通じて、学習者が主体的に知識を構築し、批判的思考を養う学習活動を実施する。

また、プログラムは、ニュースリテラシー教育の経験が少ない教員でも活用可能な形式で提供し、学習者の批判的思考やニュースリテラシーの育成に寄与することを目指す。

1. 3 本研究の構成

本研究は以下の5章構成である。第1章では研究の背景、目的、及び構成を示す。第2章では現状を把握するため、ニュースリテラシーと批判的思考に関する先行研究をレビューし、理論的および実践的な課題を抽出する。第3章ではこれらの課題を踏まえ、学習プログラムを設計・開発する。第4章では形成的評価を通じてプログラムの妥当性を検証し、改善を試みる。第5章において結果を総括し、ニュースリテラシー教育の新たな可能性を考察する。

第2章 先行研究と本研究の基本方向

2. 1 先行研究（理論的側面）

「ニュースリテラシー」はニュースを読み解く力を指す言葉だが、ニュースはメディアの一形態であり、より広義の「メディアリテラシー」に内包される概念である。メディアリテラシーは、批判的思考を行ううえで不可欠な能力とされ、ニュースを読み解く行為には、思考のプロセスや構成要素が存在する。ここでは、メディアリテラシーや批判的思考に関する先行研究を整理し、批判的思考のプロセスや構成要素に照らしながら、ニュースリテラシーの思考プロセスなどを検討する。

2. 2. 1 メディアリテラシー

「メディアリテラシー」の定義について、鈴木（1997）は「メディアリテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈で批判的に分析・評価し、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力」とし、その力を育成する取り組みも含むと述べている。Masterman（1995）は、「メディアリテラシー18の原則」を提唱し、原則2で「メディアは現実を再構成して提示している」と指摘した。これは、メディアが送り手の意図に基づいて情報を再編している点を理解し、それを批判的に読み解く重要性を示している。メディアリテラシーには複数の構成要素があるが、とりわけ批判的思考はその中核的な概念でもある。

メディアリテラシーの構成要素として中橋（2014）は以下の7項目を挙げている。

- 1 メディアを使いこなす能力
- 2 メディアの特性を理解する能力
- 3 メディアを読解・解釈・鑑賞する能力
- 4 メディアを批判的に捉える能力
- 5 考えをメディアで表現する能力
- 6 メディアによる対話とコミュニケーション能力
- 7 メディアのあり方を提案する能力

2. 1・2 批判的思考

メディアリテラシーの先行研究から、メディアを読み取る際には、その文章理解だけにとどまらず、そのニュースが発信される背景や意図にまで踏み込んで、読み解いて行く作業が必要だという。そして、こうした思考を進めていくには、批判的思考がキー概念になるという。

批判的思考とは、Ennis（1987）の定義によると「何を信じるか、もしくは何をすべきかについて決定を下すことに焦点をあわせた、合理的で内省的な思考である」

菊池（2023）はこの定義をもとに3つの視点を整理し、視点1「合理的・論理的な思考」、視点2「実践的な思考」、視点3「内省的・メタ認知」とまとめている。

山本（2017）は、メディアリテラシーと批判的思考の関係性を理論的に検討。「メディア・リテラシーは批判的思考の一領域としての側面を持つと同時に、批判的思考を働かせるための知識を得るための能力を持つ」と言及している。

さらに、楠見（2015）は、批判的思考がどのような要素によって支えられているかを構成要素モデルで説明している（図1）。批判的思考は、スキルと知識と態度によって支えられているとし、スキルと知識については認知的要素、態度は非認知的要素（情意）として分類した。非認知的要素には、傾向性や感情も含まれるという。スキルは情報の「明確化」「推論の土台の検討」「推論」「行動決定・問題解決」に至るプロセスを支える。そして、知識は演繹、帰納、類推、問題解決といった領域普遍のものと、テーマにかかわる領域固有のものがあるとした。

「態度」は、直面する問題やテーマを十分検討し、熟慮、探究し証拠に基づいて客観的に判断することである。

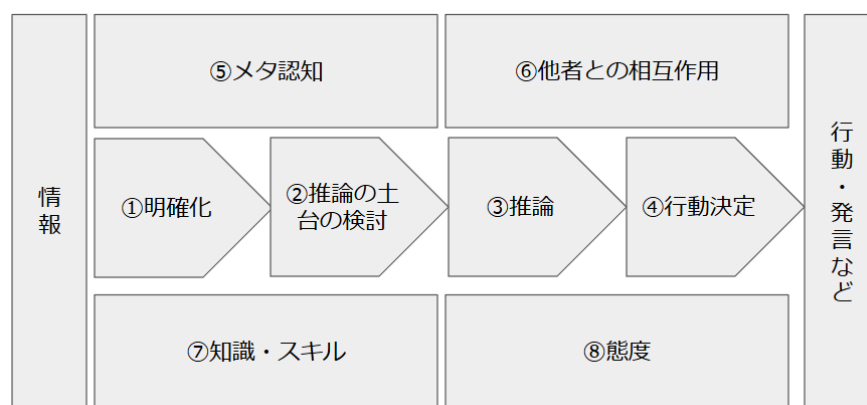


図1：批判的思考のプロセスと構成要素（楠見（2015）を筆者が簡略化）

こうしたプロセスは、ニュースを読み解いていく流れにも合致する。ニュースが扱っている議論の分析「明確化」をしたうえで、信頼できる情報源から発信された情報かどうかなどを検討する「推論の土台の検討」、提示された情報を「推論」し、ニュースを踏まえた行動や発言などにつなげるというかたちで適用できる。

2. 1. 3 ニュースリテラシー

そのうえで、「ニュースリテラシー」とは何かを考えたい。リテラシーとは、「読み書き能力」などと訳されることから、ニュースリテラシーとは、ニュースを読み解くことなどと表現される。坂本（2022）は、ニュースリテラシーとは「ジャーナリズムの基礎知識とニュースを中心とした多様なオンライン情報を読み解く能力」としている。

「ニュース」という言葉は、「まだ一般に知られていないような、新しい出来事のこと」という広義の意味合いで使われることもあるが、新聞やテレビ、ラジオといったメディア報道を指して「ニュース」という言葉を使うことも多い。ここでは、後者のメディア報道を読み解く力として「ニュースリテラシー」という言葉を使っている。メディア報道を理解するには、メディアそのものについての理解も必要であるため、ニュースリテラシーには「情報を読み解く能力」ととどまらず、「ジャーナリズムの基礎知識」も含まれると読み取れる。

この「ジャーナリズムの基礎知識」には、新聞社や放送局といったメディアの形態やその一般的なメディア特性などについて知ることが含まれるだろう。例えば、新聞社は紙媒体としての新聞を発行し、全国的なニュースを中心として取り扱う全国紙のほか地域ニュースに重点を置く地方紙があるといった内容などが想定される。

では「ニュースを中心とした多様なオンライン情報を読み解く能力」はどうか。情報を読み解く力というのは、単に書いてある情報を理解するというにとどまらず、情報の背景にある意図などにも踏み込む力が含まれる。そして、批判的思考をもって文章だけでなく、その背景などを分析。単純な文章理解にとどまらず、自ら情報を再整理するなどして、情報を再定義するようなプロセスが必要となる。

一方、批判的思考は、メディアを読み解く場面だけで必要とされるものではなく、メディアを発信する場面でも必要とされる。例えば、日本新聞協会（2000）が制定した「新聞倫理綱領」は正確さや公正さを追及しようという姿勢を持つことなどをもとめている。例えば、次のような内容である。

- ・「自由と責任」表現の自由は人間の基本的権利であり、新聞は報道・論評の完全な自由を有する。それだけに行使にあたっては重い責任を自覚し、公共の利益を害することのないよう、十分に配慮しなければならない。

- ・「正確と公正」新聞は歴史の記録者であり、記者の任務は真実の追究である。報道は正確かつ公正でなければならない、記者個人の立場や信条に左右されてはならない。論評は世におもねらず、所信を貫くべきである。

新聞倫理綱領の観点には、正確さや公正さを必要とする流れがあるが、これは多角的、客観的、証拠を重視する態度を求める批判的思考の要素と通じるものがある。ニュースの内容のポイントを定める「明確化」ということだけでなく、情報源の妥当性を考える「推論の土台の検討」、ニュースの内容が論理的かどうかを判断する「推論」といったプロセスを経て、送り手からニュースが発信されているという流れを考えると、ニュースの読解だけでなく、ニュースの制作のプロセスにも批判的プロセスが必要とされているととらえることができる。

2. 2 先行研究(実践的側面)

ニュースを使った学習実践は、NIEの取り組み例が豊富である。NIEは公式ホームページ（2024）によると、学校などで新聞を教材として活用する活動で、1930年代にアメリカで始まった取り組みだ。日本新聞協会の新聞を活用した教育実践データベースには、1610件の活用事例が記載されている。このなかには、批判的思考の涵養を目指す取り組みもあり、新聞記事を比較しながら学ぶ「新聞読み比べ」のタグづけがされている実践例は346件あった。

ただ、これらの実践例の内容は、調べ学習をするために複数の新聞社の記事を活用するといったものや複数の記事を読んで感想を述べるだけというものも多く、批判的思考の養成を主要な目的として学習実践という観点では多くはなかった。

2. 2. 1 比べ読みの実践

なかでも、2013年度に北海道白糠（しらぬか）高等学校で行われた実践は、比較的、批判的思考の涵養を意識した実践といえる。教育実践データベースの記載によると、以下のような実践であった。

高校3年生の国語の授業国語表現「情報の海を航海する」の単元で、新聞記事の違いを分析する授業を行っている。この授業では、「メディアや報道、ジャーナリズムにはどのような特性があるのかを知り、今後どのように接していくべきかを考えさせる」ことを学習目標に以下のような3時限の講義を実施していた。

- 1限目：雑誌見出しや写真タイトルを比較し、メディアの特性を理解
- 2限目：2つの新聞記事の比較、違いの背景を考察
- 3限目：インターネット上の反響コメントの比較と偏りの分析

また、奈良女子大附属中等教育学校は全国紙と地方紙の読み比べの実践を行っていた。二田（2023）は、全国紙と地方紙の比較を通じてメディアリテラシーの醸成を図ろうとしたという。この実践も、東京オリンピック開会式の複数紙の記事を使って「比べ読み」の手法を取っている。

中学3年生と高校1年生を対象とした国語の授業で、授業時間は4時間。学習課題は、東京オリンピックの開会式で聖火や聖火ランナーを取り上げた記事について全国紙と東日本大震災の被災地の地方紙とを比較し違いと共通点を整理しなさいというものだった。

新聞には全国の話題を中心に載せる「全国紙」と地域の情報を中心に載せる「地方紙」とがあるが、全国紙は全国にいる読者に情報を届ける一方、地方紙はその地域の人に情報を届ける。同じ出来事でも届ける相手が違うため、記事で取り上げる内容などが異なることがある。この特徴が、目の前の情報が編集されていることを理解した上で、多面的に考察をしたりするために必要な情報を集め比較し統合する態度や能力を育成する材料として適切だと判断したという。

白糠高校の実践では、生徒たちはメディアの特性や情報内容に偏りがあるということ自体をほとんど知らなかったという。約10年前の実践であり、情報機器の普及がより進んだ

現状では生徒の認識も異なるかもしれないが、授業の感想では「メディアには偏りがあるので、一つの情報源だけで情報収集して判断すると、偏った見方をするようになる」ということに気づいても「個人の考え方だから偏ってもよいのでは」という生徒もいたという。記事の背景にあるバイアスや価値観の深掘りが不十分だったといえるかもしれない。

奈良女子大附属中等教育学校の実践も記事同士の比較を行うという手法を使っている。メディアの編集の観点が明示されていることで、偏りを比較しやすいテーマで学習できる実践といえる。新聞記事を取り上げることについては「取材を通じて掲載されている情報の真偽が確認されており、紙面が限られているために掲載される情報が編集されていることが明確」と指摘していた。

こうした実践では記事を比較しやすいテーマを教師が選び、比較しやすい記事を抽出して学習することになる。この実践のように新聞記事を抽出することで、情報の真偽を検討するという作業をはぶいて学習に取り組めることにはメリットもあるだろう。

ただ、現実的には多くのメディアが数多くのテーマのニュースを発信している。ニュースメディア以外からも多くの情報が発信されている。多くの情報源から自ら信頼できるニュースを抽出して比べるスキルを身につけるような実践も必要だろう。

2. 2. 2 リテラシー育成の取り組み

メディアとの付き合い方を学ぶメディアリテラシー教育のなかには、チェックリスト方式を採用した取り組みがある。東京都立高等学校司書会の「か・ち・も・な・い」の頭文字からとったチェックリストを作っている。

東京都立高等学校学校司書会（2018）が発行した「都立高校の生徒のためのラーニングスキルガイド～レポート作成編～」は、高校生がレポート作成する際のガイドブックである。このなかでは、情報収集の方法を説明する部分として「ウェブサイトを使いこなそう」というページがあり、チェックリストを使った取り組みを紹介している。

ウェブサイトの良い点として、「すぐに最新情報を載せることができる」「簡単に検索でき、必要なところを探しやすい」といった点がある半面、弱点として「誰が書いているのかわからない情報も多い」「信頼できない情報も多い」と指摘。ここで、情報を見極めるキーワードとして「か・ち・も・な・い」をあげている。

このなかで

「か」は書いた人は誰か

「ち」ちがう情報と比べたか

「も」もとネタは何か

「な」なんの目的で書かれたか

「い」いつの情報なのか

などと紹介。また、情報の信頼度と情報の新しさという観点で、メディアの性格を比較して紹介している。

同様に、坂本（2021）はチェックリスト学習で以下のような「だ・い・じ・か・な」のキーワードを使っている。

- 「だ」 だれ この情報は誰が発信したか？
- 「い」 いつ いつ発信されたのか？
- 「じ」 事実 情報は事実か？ 参照（裏付け）はあるか？
- 「か」 関係 自分とどのように関係するか？
- 「な」 なぜ 情報発信の目的は何か？

さらに、情報の評価手法としてアメリカの学校教育で取り入れられている「横読み（Reading Laterally）」と呼ばれる手法も紹介。WEBページを読むときに上から下へスクロールさせて読むのではなく、ブラウザのタブを横に次々と開きながら、元サイトの信頼性を確かめるといった探究型情報評価実践という方法を提示している。坂本が行った実践では、中学校2年生 8クラス255人、情報探究実習50分。バレンタインデーについての偽新聞記事などを題材に「だいじかな」のキーワードを使ったチェックリストによる学習を行った後、横読みの手法を学び「エビデンスは何か」「他の情報源は何をいっているのか」という観点で自分たちに調べさせた。パソコン1台につき3～5人がグループとなり、自由に検索させたという。

発信者や発信時期をチェックリストで確認する行為はメディアリテラシーの基盤となる態度や考え方を学ぼうと意図深い取り組みではある。ただ、発信者や発信時期を明らかにすることで、批判的思考を行う上での判断材料を提示することはできる。だが、その判断材料をもとに「推論の土台の検討」や「推論」を行ってこそ批判的思考が行われているといえ、批判的思考を進めていくには不十分なこともある。チェックリストだけでは学習者がチェックをただけにとどまり、チェックリストに加え、「横読み」の作業を加えることは、多角的な視点を探ることができるなど、批判的思考を促す効果があるといえる。

2. 2. 3 批判的思考の育成ツール

他教科を含めた批判的思考に主眼をおいた学習実践では、支援ツールを使用することによって批判的思考をより発揮できるように促しているというものがある。

例えば、広島大学附属福山中・高校（2002）の実践では、新聞記事を使った学習で、記事の論証構造を分析し批判的に検証する実践ではワークシートを活用している。

中高6年間にわたる総合学習を全体として「LIFE」というプログラムで実践。この6カ年一貫のプログラムのうち、中学3年生の「自己の生きる地域と世界について学ぶ」のカリキュラムの一部として「新聞から情報を分析しよう」という12時間の単元が設定されている。単元は4つの段階で構成される。

- ・第1段階は、論証の構造を理解する

一つの意見は一定の論証構造をもっている。それは「事実」「解釈」「主張」「裏付け」という4要素から成り立っていることを理解する。

- ・第2段階は、論証の構造を用いて意見を分析する

単純な論理構成を持つ意見を実際に分析してみる

- ・第3段階は、批判的思考で意見を分析する

「事実」については、その事実は本当にあったのか「解釈」については論理性や整合性があるのか、といった観点から吟味する。

- ・第4段階は批判的思考による吟味の後、最終的な見解をレポートする。

このなかで、意見の論証構造を分析するにあたってワークシートを活用「論者の主張をまとめてみよう」「事実と解釈をわけてみよう」と問いかけ、論証の構造化を促している。また、自分の意見を持たせるためのワークシートでは「事実についての批判」「解釈の論理性、妥当性についての批判」「意見全体に対する批判」を記述させている。

また、小学5年生の理科授業の実践ではコンフリクトシートという支援ツールを準備し、メタ認知を醸成しようとする実践があった。加藤（2008）は児童の素朴概念を科学的概念に修正するためには、メタ認知を活用し、自身の考えを意識的に振り返らせることが重要であるという。この研究では、振り子の特性を学ぶ授業において、メタ認知ツール「コンフリクトシート」を用いる方法を検証している。この研究では、授業内の3つの場面（実験計画、実験終了後、まとめ）で「コンフリクトシート」を使用。思考の可視化と再評価を繰り返すことで、日常生活での印象などをもとにした「素朴概念」ではなく、科学的な概念形成を促すことを狙いとして、その方略として「メタ認知」を育成させることとしていた。

さらに、松田、溝邊（2022）の実践では小学3年生の理科授業で、コンフリクトシートを発展させたツールを使ってメタ認知を醸成する取り組みもあった。前述のコンフリクトシートは児童生徒のメタ認知を力を育てる取り組みだったが、メタ認知ツールを発展させる取り組みの一環として、子供自身が先行概念を意識化し、授業過程を順序化したしたCマップ(cognition map)というツールを試作し、効果検証を行った研究だった。ツール上では言語や描画を併用し自分が認知したことを記述。オノマトペやメタファーをはじめ認知するプロセスを多様に表現する様子が見えたという。

理科教育において批判的思考を育成するための支援ツールを使った「クエスチョンバーガーシート」を用いた木下ら（2014）の実践もある。初めは他者の意見や考えに対して批判的に思考させ、その思考経験をもとにして 次は思考の対象を自分自身の意見や考えに移行させることで、児童の批判的思考を促すという指導法だという。批判的思考には、他者の意見や考えを批判的思考の対象にするものと自分自身の考えを批判的思考の対象にするものがあり、後者の方が進歩的な思考だという。

まずは、教師が架空の人物の考えを「友達の考え」として提示。児童らは友達への質問を行ったうえで、自分の考え①をまとめる。そして、自分の考えに対する質問を行い、考えを修正し自分の考え②に結び付けるという手順をたどる。

クエスチョンバーガーシートは他者や自分自身に質問することを通じて批判的思考のうち、証拠を重視しようとする態度や合理的に思考しようとする能力を培うことをねらいとしている。

情報を鵜呑みにせずに捉えていくためには、情報を分析する作業が不可欠である。広島大学附属福山中高の実践は、丁寧に主張の論証を分析する作業を通じて、批判的な思考を養うことを目指すという内容だった。新聞や雑誌、テレビなどの情報がすべて「真実」であったり「正しい評価」というわけではないが、そうだからといってインターネットで流布される噂話が正しいというわけでもない。単純な批判のための批判に陥らず、主体的な意見を形成することをめざす丁寧な取り組みだった。

コンフリクトシート、Cマップ、クエスチョンバーガーシートの取り組みは、自らの考えを振り返りながら考えを進めていくことで、より高いレベルのメタ認知ができるようになることが示唆されていた。自分の考えやその変化を記述させる行為は、批判的思考を高める可能性があるといえる。広島大学附属福山中・高校の実践でも論証のプロセスを記述するワークシート学習があったが、最終的な「自分の意見」をまとめる前段として、考えの変遷やふり幅を記述する手法は効果的とみられる。

2. 2. 4 海外の事例

米ストーニーブルック大学ジャーナリズムスクール（大学院）ニュースリテラシーセンターでは、ニュースリテラシーについてのカリキュラムを開発。大学のホームページによると、以下のような取り組みがおこなわれている。

カリキュラムについて「ソーシャルメディア、テレビ、ニュースサイト、新聞や雑誌など、どのような媒体であれ、情報の信頼性や信憑性を判断するためのツールや概念を身につけ、批判的思考力を養うことを目的としている」。大学生向けに作られたこのカリキュラムで、現在は中学生や高校生にも適用されているという。そして4つも課題を指摘している。

（1）「情報過多」 毎日私たちに降り注ぐ膨大な量の情報と誤報のせいで、信頼できる情報を見つけたり、正当な報道機関を見極めたりすることが難しくなっている。

（2）「境界線の曖昧化」 信頼できるジャーナリズムと、インターネットを流れる広告、プロパガンダ、生の情報とを区別することはますます難しくなっている。

（3）「信憑性の危機」 情報を広く共有する新しいテクノロジーによって、本物であるかのように見える偽情報を広めることができるようになっている。

（4）「スピードと正確さ」 スピードと正確さの問題も重要だ。できるだけ早く情報が欲しいが、早さは間違いにつながる場合もある。特にソーシャルメディア上では、情報が間違っている可能性が高まっている。

また、ニュースリテラシーセンターでは、批判的思考のスキルとして、5つのスキルを提示している。

（1）ジャーナリズムとほかの種類の情報の違い、ジャーナリストとほかの情報提供者の違いを認識する。

（2）ジャーナリズムの観点から、ニュースとオピニオンの違いを認識する

（3）ニュースの文脈では、主張と検証、証拠と推論の違いを分析する

(4) 提示された証拠の質と情報源の信頼性に基づき、あらゆるニュース・メディア・プラットフォームにおけるニュース報道を評価し、解体することができる

(5) ニュースメディアのバイアスと視聴者のバイアスを区別する。

(Center of News Literacy, 2024)

ニュースリテラシーセンターがこうした課題を取り上げていることは、読者がニュースを読んで結論を出したり、他者と共有したりする前に、情報が信頼できるかどうかを判断できるかというリテラシーが必要だという問題意識を持っているということを指摘しているといえる。

また、アメリカで進められているニュースリテラシープロジェクトの公式ホームページによると、ニュースリテラシーとは、「ニュースやその他の情報の信頼性を判断し、事実に基づくジャーナリズムの基準を認識して、何を信頼し、共有し、行動すべきかを知る能力」としている。

2008 年に設立された非党派の教育非営利団体であるニュース リテラシー プロジェクトは、アメリカの教育に体系的な変化をもたらし、高校卒業前にすべての生徒がニュースリテラシーを習得し、批判的思考をもって市民社会に参加するための知識と能力を身に付けられるようにする全国的な運動を構築しているという。

坂本 (2019) によると、NLPとはロサンゼルス・タイムズの記者が設立。オンラインコースでニュースリテラシー教育を行っている。ジャーナリズムを土台に、ソーシャルメディアの虚偽情報が民主主義を脅かしているという認識を前提にしてニュースの真偽を見分ける方法とそれに必要な批判的思考を教えることを目的としているという。

2. 3 本研究の基本方向

本研究では中等教育を対象に、チェックリストと支援ツールを組み合わせた学習プログラムを設計し、批判的思考の育成を目指す。学習者が知識を単に覚えるのではなく、自らの経験や他者との相互作用を通じて知識を構築するプロセスをたどることにより、ニュースリテラシーの定着を図ることを目指す。

本研究で重視するのは以下の2点である。

1 点目は、チェックリストと支援ツールの活用である。

チェックリスト学習を批判的思考の基盤とし、情報の評価プロセスを明確化する。さらに学習者自身や他者の考えを可視化し、修正を促す支援ツール（例：コンフリクトシート、クエスチョンバーガーシート）を併用し、思考プロセスの可視化により、自己の意見や他者の意見を比較しながら批判的思考を段階的に深める。

2 点目は「メディア編集者」の役割の導入。

学習者がニュースの送り手（編集者）の役割を疑似体験することで、情報の正確性、公平性、信頼性に関する理解を深める環境を構築する。批判的思考を具体的な行動（記事評価・編集）に結び付けることを目指す。これは、実践的な課題解決を通じたスキル獲得を意図している。

従来のNIE (Newspaper in Education) 活動では、新聞を教材とした学習が行われてきた。その中には、新聞記事を比較する「比べ読み」など、批判的思考の養成を狙った取り組みも含まれている。

例えば、比べ読みでは異なる新聞社の記事を比較し、表現や内容の違いを見つけることで、ニュースが編集者や媒体の立場によって構成されることを理解する手がかりとなる。これは、批判的思考プロセスの「推論の土台の検討」に該当し、ニュースリテラシーを育む上で重要である。

ただ、これらの実践だけは、多様な記事の背景や文脈を深掘りするには十分ではなく、記事の一部に注目するにとどまることも多い。インターネット上の情報源から信頼性の高いニュースを選別するスキルを育成する具体的な実践例も少なかった。

批判的思考のプロセスは、「情報の明確化」「推論の土台の検討」「推論」を踏まえて「行動決定・問題解決」に至るスキルだが、従来のニュースを使った学習では、ニュース比較に重点がおかれ、情報の明確化、推論の土台の検討の段階でとどまり、多角的な視点で情報や考えを再構成する「推論」の段階の学習活動が十分ではないことも多かった。

これらの点をふまえ、本研究では以下の手法を導入する。

(1) チェックリスト学習

情報源や発信時期の確認、客観的な視点の育成

(2) 支援ツールによる学習

他者の考えとしての「記事」の提示。教師が記事を提示し、それを「他者の考え」として認識させる。質問の生成と記述。学習者は記事に基づき質問を生成し、個別の考え（考え①）を記述。

(3) 協調学習と再評価

グループ学習で他者と意見を交換し、「横読み」などの方法を用いて情報を多角的に検証。

(4) 考えの修正と再記述

協調学習の結果を基に考えを修正し、最終的な意見（考え②）を記述。

プログラムでは、こうした手法の導入により、批判的思考のプロセス（「情報の明確化」「推論の土台の検討」「推論」「行動決定」）を段階的に支援。他者との相互作用を通じて視野を広げ、メタ認知能力を向上させる。

また「メディア編集者」の役割を導入することで、学習者の意識を知識の受容者から送り手に転換。従来のNIEを発展させることで、批判的思考とメディアリテラシーを育成する新たな学習モデルを提示する。

第3章 学習プログラムの設計と開発

3. 1 学習プログラムの設計

3. 1. 1 学習プログラムの概要

プログラムは、編集者としての疑似体験を通じて、批判的思考を育成することを目的とする。具体的には、ニュース記事の 分析・吟味・発信 というプロセスを通じて、以下の能力の育成を目指す。

- ・情報の信頼性を評価するスキル
- ・自らの意見を形成し、論理的に表現する力
- ・他者と協力して多角的な視点を形成する力

マスメディアの編集者が「正確性」「公平性」「多角的視点」を重視してニュースを編集するように、プログラムでは編集者としての役割を体験することで、批判的思考プロセスを具体的に実践する。

3. 1. 2 編集のプロセスと批判的思考

批判的思考のプロセスと要素 上記の図は、楠見（2015）が分析した「批判的思考のプロセスと要素」を筆者が簡略化した模式図である。

批判的思考は「①情報の明確化」「②推論の土台の検討」「③推論」「④行動決定」といったプロセスで構成され、これらはニュースの分析や編集においても適用可能である。

プログラムでは、批判的思考のプロセス（明確化、推論の土台の検討、推論、行動決定）を学習内容に組み込む。例えば、第1段階では「①明確化」として、記事の事実と意見を区別。第2段階では「②推論の土台の検討」として記事のバイアスを分析する活動を設定している。さらに、第3段階で理由や根拠に基づいて結論を導き（③推論）、第4段階で最終的な意思決定や問題解決にいたる（④行動決定）にたどりつくという流れだ。さらに、こうしたプロセスを俯瞰的にチェックする（⑤メタ認知）や（⑥他者との相互作用）、また、（⑦知識・スキル）やそれを支える（⑧態度）といった要素で、批判的思考が構成されている。

ニュースなどを批判的思考で分析する場合、この図では左端の「情報」の項目が、ニュースとなり、ニュースを見た読者が、その内容を吟味していく①～④のプロセスで、ニュースを批判的思考で判断する流れというかたちで、みることができる。

このプロセスはニュースの生成段階においてもあてはめることができる。マスメディアがニュースを提供する際にも、「問題は何か」を明確にし、情報の信頼性や隠れた前提・バイアスがないかを検討し、理由や根拠に基づいて結論を導き、最終的な意思決定や問題

解決というプロセスでニュースの取材や選定が行われている。例えば、情報が入ってきても信憑性が薄いと判断された場合は記事化は見送ることになるし、また根拠が薄いと判断された場合は、確認取材（裏取り取材）なども行われる。その判断をめぐっては新規性などとともに正確性、公平性などを重視。その根本的な精神は、新聞倫理綱領などにまとめられている。

3. 1. 3 学習活動の目標

情報社会が進み、中学生・高校生を取り巻く環境のなかにも多くの情報が氾濫している。新聞、テレビ、雑誌といったオールドメディアと呼ばれる媒体もそうだが、インターネット、SNSを通じた情報量は増える一方だ。本来、自分で得た情報はそれが正しいものであるかどうかは一定、吟味する必要があるものだが、実際は鵜呑みにしてしまうケースも少なくない。

現代の情報社会において、生徒が主体的に情報を評価し、多角的な視点を持ちながら論理的に意見を形成する能力を養う。本学習プログラムでは、ニュース記事の分析・吟味・発信プロセスを通じて、生徒が以下のような力を総合的に身につけることを目指す。

（学習目標）

ニュース記事を含む多様な情報を批判的に分析し、多角的な視点を取り入れながら、論理的な結論を導き出し、それを説得力をもって表現する能力を育成する。さらに、この能力を日常生活や他の学びに応用できる態度を形成する。

3. 1. 4 学習活動の構成

学習は個人によるワークと4人程度のグループ学習で行われる。

教師は「編集長」で、生徒たちは「編集者」という設定。グループごとにネット上から記事を選んで、インターネットニュースサイトの特集ページをつくる、という形式で学習を進める。

編集長として、教師がグループに「メイン記事」を提供。この記事を分析し、読み応えのある特集ページをつくってほしいというのが、本プログラムでのミッションとなる。各グループはこのメイン記事の真偽や不十分点などを検証しつつ、インターネット上から4～5本の関連記事をピックアップすることで、特集ページを作成するという作業を行う。

学習活動は4段階で構成される。

- 第1段階 記事を読み、信頼性を見極める
- 第2段階 記事内容を吟味する
- 第3段階 関連記事を集める
- 第4段階 発表とリフレクション

第1段階 記事を読み、記事の信頼性を見極める

情報の内容確認と信頼性を見極め。編集長である「教師」から提示されたメイン記事について、情報の内容確認と信頼性を見極めを行う。メイン記事は教師がニュース記事から選んで生徒たちに示す。

生徒たちは記事を読んだ後、「ワークシート1」を使いながら信頼性を見極めを行う。

批判的思考のプロセスでは、「問題は何か」を明確にし（①明確化）、情報の信頼性や隠れた前提・バイアスがないかを検討し（②推論の土台の検討）、理由や根拠に基づいて結論を導き（③推論）、最終的な意思決定や問題解決するという流れをたどる。

第1段階ではワークシートを使いながら、何が書かれている記事なのかを一読したあと、情報の信頼性を確認する作業を行うことで、この①②のプロセスを再現する。また、記事を読んだだけではなく、ワークシートで確認するという作業を行うことは、情報を鵜呑みにせず、確認作業を行うという批判的思考の要素における「⑧態度」の醸成につながると考える。

この段階では、まず、学習者は記事を読解したうえ、この情報がどの程度信頼できるものなのか考え始めることになる。情報信頼性のチェックとしてはまず、「ワークシート」で、この情報は誰が発信したか。いつ発信されたのかといったことをチェックリストで確認。情報の発信者が匿名ブログなどであれば、情報の信頼性に問題がある可能性がある判断されるし、発信時期が古ければ、最新動向で事態が変化していることも想定しなくてはならない。

ワークシート1は、アメリカの図書館協会が開発したクラブテストと呼ばれるチェックリストを使って考えさせる授業をもとに、坂本旬が日本語版として考案した「だいじかな」のチェックリストをベースに改編したものである。

「だいじかな」は以下の5つの項目をチェックするものである。

- だ だれ？ この情報は誰が発信したか？
- い いつ？ いつ発信されたのか？
- じ 事実？ 情報は事実か？ 参照はあるか？
- か 関係？ 自分とどのように関係するか？
- な なぜ？ 情報発信の目的は何か？

ここでは、ニュース記事の読解に使用するため、記事のうち事実と解釈、主張、意見を区分けして考える必要があるとして、「関係」を解釈・意見と置き換えた。

第2段階 記事を吟味する

メイン記事の内容を吟味した後、協調学習としてグループ内で意見交換を行う。これが第二段階である。記事内容の吟味については、ワークシート2を準備した。まずは個人で記事内容について、疑問に思ったことを書き込む。その後、グループ内で発表しあう。ワークシート2を通じて、記事についての事実と解釈、意見を分けて分析することで、批判的思考における③推論の考えを深める効果が期待できる。

記事の吟味にあたっては「横読み」と呼ばれる手法を用いて、記事をチェックする方法を紹介する。

また、ひとつの記事をめくり、自分で思考するだけでなく、他者の考えもふまえて考えを進めることであれば、⑥他者との相互作用が促進され、新たな視点をもつことであれば⑦メタ認知にもつながることが期待される。

記事の吟味のために使うワークシート2はクエスチョン・バーガーと呼ばれるワークシートを使った理科教育での実践例を参考に作成した。

クエスチョン・バーガーは、まず他者の考えを批判的に分析したあと、思考を自分自身の考えに移行させることにより、段階的に批判的思考を育成できるのではないかという観点で考えられたものだ。

ワークシート2では、まず記事の内容を「他者の意見」と位置づけ、記事に対する疑問点を列挙した後、自分の考えを生成。さらに自分の考えにも自分自身で疑問を投げかけることで、批判的思考をふまえた自分の考えを作っていくのではないかと考えた。

第3段階 関連記事を集める

メイン記事に関連する情報をインターネット検索で収集する。関連情報を収集する際には、類比、対比、因果などを意識しながら、メイン記事をより深く理解するための記事を集める。記事を集める際には、関連する記事であっても横読みをするなどして、その情報の信頼性を担保する。

1人2～3本の記事を集めた後、再びグループで協議を行い、最終的にはグループ全体で5～6本の記事をまとめる。まとめた記事はワークシート3に記入する

記事を集めてまとめページをつくるというのが目的なので記事を集めるという行為が、④行動決定にあたる。他者との話し合いで俯瞰した視点を持つことができるとして⑤、協議によって他者との相互作用⑥もえられる。メイン記事の関連情報を調べていく作業は、関連する領域固有の知識も得られるため、⑦も該当する。

第4段階 発表とリフレクション

リフレクションでは、情報の信憑性についてどう考えたか、記事内容について自身がどう考えたのか、のほか、関連記事を選んだ理由、または、こんな関連記事を選びたかったが選べなかったという作業プロセスのふりかえりのほか、話し合いによって自分がどう影響を受けたのかということを振り返る。振り返りの内容はワークシート4に記入する

自分の作業を振り返ることを通じ⑤のメタ視点の獲得を目指すほか、情報を吟味する⑧態度を育成するのに貢献する。

プログラムの各段階は、批判的思考のプロセスや要素に対応している。

表 1：プログラムの概要図

	主な内容	活動形式	使用ツール	批判的思考プロセス
第1段階 (1時間目)	記事を読み、信頼性を見極める	個別学習	ワークシート 1 「チェックリスト」	明確化
第2段階 (2時間目)	記事内容を吟味する	個別＋グループ学習	ワークシート2 「クエスチョンシート」	推論の土台の検討
第3段階 (3時間目)	関連記事を集める	グループ学習	ワークシート3 ＋インターネット	推論
第4段階 (4時間目)	発表とリフレクション	個別学習＋共有	ワークシート4 「リフレクション」	行動決定

3・1・5 学習活動における評価の観点と方法

社会的な問題に対して興味や関心を持ち、その問題に関する知識や情報をメディアを活用しながら収集できているか。客観的な事実を背景にしながら、自分の意見を表現できているか。リフレクションでまとめた文章などをもとに以下の観点から評価する。

分析力 記事の信頼性を分析し、多角的な視点で情報を吟味できたかどうか。ワークシートの記載内容を通じて、情報の信頼性や多角的な視点の必要性を論理的に示せたかを確認する。

論理力 グループ学習で、根拠に基づいて意見を形成し、明確に表現できるか。

協調力 また他者と協力し、多様な視点を統合した結論を導き出せたか。

応用力 学習で得た知見やスキルを日常生活や他教科に応用する姿勢を持つことができたか。

また、批判的思考が身についたかどうかについては、楠見ら（2016）の児童・生徒用一般的批判的思考態度（CT-G）と学習場面の批判的思考態度（CT-S, 各10項目）を用いて調査。学習前後の状況を比較することで、検証できると考える。

3. 2 学習プログラムの開発

批判的思考を養うニュースリテラシーの学習プログラムを総合学習の4回分の50分授業で行うプログラムとして設定し作成した。それぞれの授業計画はサンプルテーマで具体例をまとめている。

プログラム作成にあたっては、ガニエの9教授事象を活用して設計を行った。

3. 2. 1 1時間目 ニュースを読み解くスキルを学ぶ

まずは、1時間目の概要図（表2）を示す。

この時間は、生徒がニュース記事の内容を読み解き、事実と解釈、意見を区別する能力を身につけることを目標とし、教師が提示した記事をワークシート1を使って分析する作業を行う。

プログラム1時間目・導入では、ガニエの9教授事象の「1学習者の注意を喚起する」「2授業の目標を知らせる」「3前提条件を思い出させる」を対応させた。具体的には、フェイクニュースの例を挙げて問題提起し、学習者の注意を喚起したうえで、授業目標を提示する。

その後、「4新しい事項を提示する」「5学習の指針を与える」に対応するものとして、チェックリスト（ワークシート1）を提示して、使用方法を講義。実際にワークシート学習を行うことで、「6練習の機会をつくる」。全体共有や振り返りの時間をもうけることで、「7フィードバックを与える」「8学習の成果を評価する」「9保持と転移を高める」を確保した。

2時間目以降も同様の設計を行っている。

表2 プログラム1時間目の概要図

	学習内容	発話計画	ガニエ9教授事象
導入（10分）	・教師がニュースリテラシーと批判的思考の重要性を解説 ・フェイクニュースの例をあげて問題提起	・「みなさんはニュースをどれくらい見ますか。きょうはニュースを見る力について学びます」	1 学習者の注意を喚起する 2 授業の目標を知らせる 3 前提条件を思い出させる
講義（15分）	・批判的思考とは何かを学ぶ	・「起こった事実のことを書いているのか、筆者	4 新しい事項を提示する

分)	・チェックリストの使い方	の意見や見解を書いているのかを区別してみましよう」	5 学習の指針を与える
個別学習 (15分)	・教師が選定したニュース記事を配布 ・ワークシート1を使って書き込みを行う	・「配られたニュース記事を読んで、ワークシートを使って分析してみよう。5つのポイントに沿って記入してください」	6 練習の機会をつくる
全体共有 (5分)	・生徒が記入内容を発表。教師が補足を行う	・「誰が発信した情報かによってニュースの信頼性が変わること気づいた人はいますか」	7 フィードバックを与える
振り返り (5分)	記事を読む際に注意すべきポイントを確認する	・日常生活でニュースを見ると、事実と意見の区別を意識してみましよう	8 学習の成果を評価する 9 保持と転移を高める

次に、1時間目のプログラムをテーマ「オーバーツーリズム」で取り上げた場合の進行例（表3）を示す。メイン記事は、産経ニュースで2024年11月4日にアップされた記事「秋の古都は『徒歩並み』のノロノロ渋滞 京都市はマイカーの観光駐車場利用を禁止、効果は」を取り上げた。

<https://www.sankei.com/article/20241104-EZNAZGIQGGZIOZBFYUHOOLZYVQM/>

表3：プログラム 1時間目の進行例

導入	・みなさんはニュースをどれくらい見ますか。きょうはニュースを見る力について学びます。 ・わたしたちは、さまざまニュースを通じて新しい情報を知りますが、ときに間違った情報を受け取ってしまうこともあります。情報の真偽を確かめることは重要なことです。 ・フェイクニュースという言葉聞いたことがありますか。インターネットのなかには、相手にわざと誤った情報を伝えようとするものもあります。 ・物事を吟味して、何が正しく何が間違っているのかを見極める力は「批判的思考力」とも呼ばれます。批判といっても相手を批難するわけではなく、「この部分は本当に正しいのか」といったことを確かめながら考える力でもあります。 ・今回は、みなさんに「メディア編集者」になってもらい、インターネットの特集ページをつくってもらい学習に取り組みます。編集長役の先生がわたし「メイン記事」を分析し、インターネット検索で関連記事を探してもらいます。1回目の授業では、まずメイン記事がどんな記事なのかを分析してもらい
----	--

	ます。				
講義	・今回、編集長である先生が選んだ記事は「秋の古都は『徒歩並み』のノロノロ渋滞 京都市はマイカーの観光駐車場利用を禁止、効果は」という記事です。 ・この記事みなさんに分析してもらいますが、分析するときには「ワークシート1」を活用します。ワークシートに書き込みを進めながら記事を分析してみましょう。 ・まず、一つ目の項目が「発信者は誰か」です。ニュースをみるときにその発信者が誰であるかを確認することは重要なことです。専門的にニュースを発信している新聞社やテレビ局といったマスメディアの情報と個人の発信したSNS情報では、一般的にはマスメディア情報の方が信頼できます。同じ個人の発言でも専門家とそうでない人では専門家の方が信頼されます。もちろん、マスメディアも専門家も間違える可能性はあるわけですが、ニュースのことを分析するうえで発信者を確認することは非常に重要なことです。また、書かれている記事のなかでの情報源がどこなのかも大事な要素です。 ・二つ目は、記事が発信された時期です。語られている内容が古いのか新しいのかによって意味合いが大きく変わることがあります。 ・三つ目、四つ目の項目は、事実として書かれていることと、意見や解釈として書かれていることを仕分けしてみようという項目です。すべてを書き出す必要はありませんが、かかれていることが事実なのか、だれかの意見や解釈なのかは分けて考える必要があります。 ・最後の五つ目は、記事の狙いです。記事を書いた人はどういった効果を考えて記事を書いたのかを推測してみましょう。				
	(個別学習) ワークシート1の記入例 <table border="1"> <tr> <td>発信者は誰か</td><td> 発信者：産経新聞 取材先（情報提供者） 京都市の担当者 土産物店の大井秀民さん（地元住民の視点） 龍谷大学 阿部大輔教授（専門家の見解） </td></tr> <tr> <td>発信されたのはいつか</td><td> 2024年11月4日 15:20に公開された記事 記事中で触れられるデータや取り組み期間： 渋滞調査（2023年11月のデータ） 新たな対策（2024年10月10日開始） </td></tr> </table>	発信者は誰か	発信者：産経新聞 取材先（情報提供者） 京都市の担当者 土産物店の大井秀民さん（地元住民の視点） 龍谷大学 阿部大輔教授（専門家の見解）	発信されたのはいつか	2024年11月4日 15:20に公開された記事 記事中で触れられるデータや取り組み期間： 渋滞調査（2023年11月のデータ） 新たな対策（2024年10月10日開始）
発信者は誰か	発信者：産経新聞 取材先（情報提供者） 京都市の担当者 土産物店の大井秀民さん（地元住民の視点） 龍谷大学 阿部大輔教授（専門家の見解）				
発信されたのはいつか	2024年11月4日 15:20に公開された記事 記事中で触れられるデータや取り組み期間： 渋滞調査（2023年11月のデータ） 新たな対策（2024年10月10日開始）				

	事実として書かれていることは	京都市の市営観光駐車場の自家用車利用が禁止され、観光バスなどのみの事前予約制に変更された。 市によると、駐車場への到着時間が平均3分短縮された。 市が郊外駐車場と公共交通を利用する「パークアンドライド」を推奨している
	解釈・意見として書かれていることは	駐車場の予約制に切り替えた取り組みは、混雑回避の点で妥当性がある（阿部教授）。 「さらなる対策が必要」という記者の論調。 タクシーの台数規制も必要ではないか（関係者の発言） 混雑で街のイメージが悪化すると再訪につながらない（阿部教授の懸念）
	記事のねらいは何か	京都市の観光渋滞対策を伝えると同時に、問題点や課題を提示。 読者に「オーバーツーリズム」や「都市計画」について考えさせる狙いがある。 問題解決のための具体的な施策（パークアンドライド、予約制）を紹介し、議論を喚起する意図。
全体共有	- 各グループから1名が「気づいたこと」を発表 「この記事の『駐車場の事前予約制』は事実として書かれていますが、それが対策として充分かどうかというのは意見の部分ですね」	
振り返り	- ニュースを読む際には、まず『事実』をしっかり押さえ、それがどう解釈されているかを見極めることが大切です - 今日学んだチェックリストを、次にニュースを読むときも使ってみてください - また、日常生活でニュースを見るとき、事実と意見の区別を意識してみましよう	

3. 2. 2 2時間目：記事を吟味し多角的に分析する

2時間目の概要図を示す。

（目標）ニュース記事の背景や意図、バイアスを踏まえて読み解く

（内容）ワークシート2を使って記事を分析

表4：プログラム2時間目の概要図

	学習内容	発話計画
導入（10分）	「バイアス」と「事実 vs 解釈」の区別について解説	「ニュースを読むとき、どの部分を最も疑いましたか」
個人学習（5分）	・それぞれワークシート2を使って記事を吟味	「記事を読んだ疑問を3つ書いてから、記事を読んだ自分の考えを書いてみてください。記事への疑問は、書いた記者に質問するつもりで、書いてみて下さい」
グループ学習（20分）	・横読みの方法を学び、記事をインターネットで調べ直して信頼性を検証する。	「違いを発見したとき、それがなぜ生じているかをグループで議論してください」
個人学習（5分）	・ワークシート2の自分の考え②を記入	「考え①と内容が変わってもいいですし、付け加えてもかまいません」
全体共有（5分）	・グループごとに分析結果を発表	「それぞれのグループが調べたことや考えたことを簡潔にまとめて発表してください」
まとめ（5分）	・多角的な視点を持つこと意味を振り返る	「自分の考えとは異なる視点を持つということにはどんな意味があるのでしょうか」

次に2時間目のプログラムをテーマ「オーバーツーリズム」で取り上げた場合の進行例（表5）を示す。メイン記事は、産経ニュースで2024年11月4日にアップされた記事「秋の古都は『徒歩並み』のノロノロ渋滞 京都市はマイカーの観光駐車場利用を禁止、効果は」を取り上げている。

表5：プログラム 2時間目の進行例

導入	2時間目の授業ですね。1時間目では、ニュースの『事実』と『解釈』『意見』を区別することの大切さを学びました。今日は、それをさらに深めていきます。 情報には『バイアス』というものが含まれることがあります。『バイアス』とは何だと思えますか。『バイアス』とは情報の偏りや、特定の立場を強調する傾向のことです。 バイアスがあると、同じ出来事でも、伝え方や強調されるポイントが変わります。つまり『この情報はどのような立場から書かれているのか』を考えることがとても大切なんです。 ニュースは一定、公正さを意識してつくられていますが、どこに視点がおかれた内容かによって、描かれる内容が変わります。例えば、商店街をテーマに記事を書くにしても「どんな商店街が繁盛しているか」「さびれた商店街の再生に向けてどんな取り組みをしているか」では観点が異なります。そうした背景を考えてみましょう。 これは、どちらが良いか悪いかということではなく、どういった視点に立って記述されているかということを知ることが重要だという話です。一方、インターネット上には、人をだまそうという視点で書かれたものや誰かを貶めることを目的にした情報もあります。そうした情報に気づくためにも文章が書かれた視点を考えることは大切です。 例えば、1時間目のオーバーツーリズムの記事について考えてみましょう。この中で、京都市の渋滞対策について書かれていますが、記事を書いた人がどの立場を重視していると思えますか 今日は、この記事『ワークシート2』を使って詳しく分析していきます。まず、この記事を読んで、次の視点で『バイアス』を考えてみましょう。 どの立場の意見が重視されているか？、どの立場の意見が欠けているか？ それではワークシート2の記入の仕方を説明します。まず、記事を読んで抱いたみなさんの疑問を3つ書いてから、記事を読んだ自分の考えを書いてみてください。記事への疑問は、書いた記者に質問するつもりで、書いてみて下さい。
個人学習	○ワークシート2 記入例 記事への疑問

	1	「パークアンドライド」の利用者は増えているのか
	2	止められない自家用車はどうなっているのか
	3	観光客が増えることでよいこともあるのではないか
	記事を読んだ自分の考え 記事を読んで京都市の渋滞対策は、一定の効果を上げていることが分かったが、パークアンドライドをもっと普及させるなど、さらなる対応が必要だと思った。一方、観光客が増えるのは悪いことばかりではなく観光収入が増えるなどのメリットもある。	
グループ学習	それでは、次にグループ学習を進めてみましょう。まずはお互いの疑問や意見を紹介し合った後、インターネット検索で「横読み」と呼ばれる検索を進めてみましょう。 横読みとは、一つの文章を縦にスクロールさせて読むのではなく、タグを次々に開いて、複数の情報源の記事にあたる手法です。 この記事について、例えば、他の観光都市（国内なら富士山 海外ならベネチア、バルセロナなど）の渋滞対策やオーバーツーリズム対策を調べてみましょう。 また、観光客側はどう考えているのか、といったことはわからないでしょうか。 インターネットで調べるときは、できるだけ信頼できる情報源を見つけてください。政府や自治体の公式発表や大手メディアの記事などを参考にするのが良いでしょう。 横読みを行い、グループのみなさんと意見交換をしたことをふまえて、もう一度考えて、自分の意見を書いてみましょう。意見が変わってもつけ加えてもよいです。	
個人学習	○横読みの結果やグループの意見も踏まえて、もう一度考えた自分の考え② 記事を読んで京都市の渋滞対策は、一定の効果を上げていることが分かったが、パークアンドライドをもっと普及させるなど、さらなる対応が必要だと思った。一方、観光客が増えるのは悪いことばかりではなく観光収入が増えるな	

	どのメリットもある。観光客から観光税をとるなどして渋滞対策に予算をまわす方法もあった。
全体共有	・各グループの発表を聞いてみましょう。それぞれのグループが調べたことや考えたことを簡潔にまとめて発表してください。特に『この記事に対する新たな視点』や『横読み』でわかったことを共有してください
まとめ	・今日は、ニュース記事を多角的な視点か分析する方法を学びました。特に、横読みの手法を使ってさまざまな情報源を比較したことは、批判的思考を深めるうえで非常に重要な取り組みでした ・みなさん、記事の内容だけでなく、その視点や立場を読み取ることが大事だということがわかりましたね。 ・ニュース記事を読むとき、次回からは今日学んだことを実生活でも活用してみてください。たとえば、SNSの投稿やテレビの報道を見たときに、『これはどのような立場から書かれているのか』と考えてみましょう

3. 2. 3 3時間目：特集ページの作成

3時間目の概要図を（表6）で示す。

（目標）批判的に情報を吟味し、論理的な結論を導く力を養う。

（内容）内容や信頼性や視点の多様性を踏まえて、関連する記事や情報を収集する。

表6：プログラム3時間目の概要図

	学習内容	発話計画
導入（5分）	・学習目標を共有	「この記事に関する特集ページを作るには、どんな補足情報が必要ですか」
共同学習（40分）	・グループで相談しながら、インターネットを使い、関連する信頼できるニュースを5本収集。 ワークシート3に記入し、発表に向けた準備	「このニュースを補完するために、どの観点から記事を探すべきでしょうか」

まとめ（5分）	・ 次回の発表準備の確認	「ニュースを深く読み解くには異なる視点が重要ですね」
---------	--------------	----------------------------

3時間目のプログラムをテーマ「オーバーツーリズム」で取り上げた場合の進行例を表7として示す。メイン記事は、産経ニュースで2024年11月4日にアップされた記事「秋の古都は『徒歩並み』のノロノロ渋滞 京都市はマイカーの観光駐車場利用を禁止、効果は」を取り上げている。

表7：プログラム 3時間目の進行例

導入	・ それでは特集ページの作成に取り組みます。この活動では、前回学んだ記事の分析スキルを活かして、ニュースを深く掘り下げていきます。 ・ この記事に関する特集ページを作成するには、どのような補足情報が必要だと思いますか。 ・ たとえば、オーバーツーリズムに関連する他都市の事例や、観光客や地元住民の視点。こうした情報を集めてページを作ることで、読者に多角的な視点でオーバーツーリズムを考えてもらう特集を作ることができます。 ・ まず、グループでメイン記事をもう一度確認してください。そして、補足情報として必要だと思う観点を話し合ってみましょう。」 ・ たとえば、『地元住民の意見』や『観光客の視点』『経済的な影響』などの観点が考えられます。こうしたことを考えながら記事を集めてみましょう。
共同学習（作業中）	・ 集めた記事はチェックリストや「横読み」などの手法を使いながら、記事の信頼性を確かめていきましょう。 ・ どんなキーワードで検索を行っていますか？視点が偏らないように複数の観点を意識してください。」 ・ 見つけた記事の信頼性はどうか。発信者や発信時期を確認していますか ・ 横読みの方法を使って、情報を比較検討してみましょう。同じテーマでも意見が異なる記事があるかもしれません。 ・ たとえば、『観光地 混雑緩和 対策』や『京都 渋滞 問題』といった具体的なキーワードを試してみてください ・ 信頼性の高い記事を見つけるには、新聞社や政府機関の公式サイトに注目するとよいですね ・ 次回にはグループごとに発表をしてもらいます。グループの役割分担を決めておきましょう。

ワークシート3作成案

○ワークシート3 特集タイトル					
観光地の悩みオーバーツーリズムの課題と対策					
	タイトル	出典、日時	選んだ理由、視点	アドレス	
	メイン記事	秋の古都は「徒歩並み」のノロノロ渋滞 京都市はマイカーの観光駐車場利用を禁止、効果は	産経ニュース 2024年11月4日		https://www.sankticle/20241104-EJOZBFYUH00LZYVQM
1	観光用語集「オーバーツーリズム」	JTB総合研究所 日時記載なし	定義や背景を解説。メイン記事の基礎情報を補完。専門家（観光研究者）の視点		https://www.tourism-database/gover-tourism/
2	観光客の分散化	京都市役所ホームページ 2023年12月19日	行政の公式対策を示し、メイン記事で述べられている政策の具体例を補完できる。行政の視点		https://www.city.jp/sankan/page/1.html
3	「行く気もうせてしまう」外国人観光客であふれる観光地 伸び悩む国内旅行	産経ニュース 2024年12月23日 午後8時20分	国内観光客への影響。地元観光業の視点。		https://www.sankticle/20241223-L2LD64I06WLKXDMI
4	姫路城が検討する外国人への「二重価格」民間にも導入の動き	朝日新聞 2024年6月22日 午後2時	二重価格という解決策。他都市の対策例。		https://www.asahicles/ASS6P10Z2SM.html
5	観光客が多過ぎて… オーバーツーリズムに悩まされている世界の人気観光地15	ライフインサイダー 2024年12月10日 7時5分	類似の事例は世界中にあることがわかる。		https://www.businesser.jp/post-29783

まとめ	今日の授業では、メイン記事を軸に特集ページを作るために記事を集める作業を行いました。ニュースを深く読み解くために、ただ記事を読むだけでなく、関連情報を集め、異なる視点を取り入れる作業を体験しました

	「観光地の魅力を守るために、訪れる人々がどのように行動すべきかを考える」 本特集では、京都市を例に「オーバーツーリズム」の課題を取り上げました。観光地が抱える渋滞や環境への負荷といった問題は、単に訪問者数が多いことだけが原因ではありません。交通手段の選択や観光地での行動、地元住民との関係性など、さまざまな要因が絡み合っています。 記事を調べる中で、観光地を維持するためには、行政による取り組みだけでなく、観光客一人ひとりの行動も重要であると感じました。たとえば、公共交通機関の利用や観光マナーの向上といった、小さな行動の積み重ねが大きな改善につながるのではないのでしょうか。 本特集を通じて、観光地の未来について考えるきっかけを提供できれば幸いです。そして、次回の旅が「地域を支えるもの」として実りあるものになることを願っています。
--	---

3. 2. 4 4時間目：プレゼンテーションとリフレクション

4時間目の概要図を表8で示す。

（目標）学びを振り返り、自分の思考プロセスを確認する

（内容）グループ発表したうえで個人のふりかえりを書き留める

表8：プログラム4時間目の概要図

--	--	--

導入（5分）	目標を再確認	「この特集ページで伝えたいメッセージは何ですか」
発表（20分）	グループごとに作った特集ページについて発表する 他グループからの質問を受け付ける	「他のグループの特集ページから学べる点は何ですか」
ふりかえり（20分）	個人の振り返りを文章でまとめる	「この記事に対する考え方が授業の前後でどう変わりましたか」
まとめ（5分）	教師がフィードバック	「日常生活でどのようにニュースリテラシーを活用するか考えましょう。」

4時間目のプログラムをテーマ「オーバーツーリズム」で取り上げた場合の進行例を表9として示す。メイン記事は、産経ニュースで2024年11月4日にアップされた記事「秋の古都は『徒歩並み』のノロノロ渋滞 京都市はマイカーの観光駐車場利用を禁止、効果は」を取り上げている。

表9：プログラム 4時間目の発話サンプル

導入	・いよいよ特集ページの発表です。今回は、実際のホームページなどの作成は行わず、選んだ記事をグループごとに発表します。ここまで、ニュースを読み解き、信頼性や記事の書かれた視点などを考慮しながら、特集ページを作成してきました。今日はその成果を発表し、最後に学びを振り返ります。 ・今回の発表では、みなさんが『京都市のオーバーツーリズム』の記事をきっかけに深く考えてきました。多角的な視点を取り入れて作成した特集ページを発表してもらいます。 ・発表は情報の信頼性や多角的な視点を取り入れているかといった内容の深さ。特集ページがわかりやすく整理されているかという構成、聞き手を引きつけている発表の仕方などが大事です。
発表	・それでは、各グループの発表を始めましょう。それぞれ、特集ページのテーマとメイン記事とともに関連記事を選んだ理由について簡単に説明してください。追加情報を取り入れ、どんな視点を意識して構成したのか話してください。 「どのグループの特集ページが印象に残りましたか。その理由は何ですか」

	「特に参考になった視点や、改善点を共有してください。」
ふりかえり	「それでは、今日の活動を振り返りましょう。以下の内容をリフレクションシートに記入してください。」 1. 今回の学び：発表やフィードバックを通じて新たに得た知見は何ですか？ 2. グループの良い点：特集ページ作成や発表で、グループが上手にできたことは何ですか？ 3. 改善点：次回に活かしたいこと、足りなかった視点や情報は何か？ 4. 今後の応用：この経験を日常生活や他の学びでどう活かしますか？
まとめ	・今回の4回にわたる学びを通じて、みなさんはニュースを単に受け取るのではなく、多角的な視点で分析し、自分の意見を持つ力を身につけました ・「日常生活でニュースを読むとき、今日学んだ『事実と解釈の区別』や『視点の確認』を意識してみてください。これからも、自分の考えを深め、他者と共有する力を磨いていきましょう。」

○ワークシート4

1 今回の学び	他のグループの発表を聞いて、観光渋滞の問題が京都市だけでなく、世界中の観光地で共有されている課題であることが分かりました。
2 上手くできたこと	横読みの手法を用いて、異なる記事から補足情報を集めたことで、特集ページの内容が多角的で説得力のあるものになりました。
3. 改善点	観光客や地元住民だけでなく、地元事業者や観光業に従事する人々の視点も取り入れるべきだったと思います。これにより、より多様な利害関係を反映した内容にできたはずです。 発表時にグループの主張をさらにわかりやすく伝える工夫が必要でした。具体例を示したり、データをビジュアル化して示すと、聞き手にとって理解しやすくなったと思います。
4. 今後の応用	今後ニュースを読む際には、情報の信頼性やバイアスを意識し、複数の情報源を比較する習慣を身につけたいと思います。特に、SNSで目にする情報は、これまで以上に慎重に受け取るようにします。 授業で学んだ「多角的な視点を持つ」ことを、社会科や国語の授業でのディスカッションや作文活動に活かしたいです。また、日常生活では、地域の問題や社会の課題を考える際に役立てたいです。

3. 2. 5 教材と準備物

教材と準備物

ニュース記事（教師が準備）

ワークシート1「チェックリスト」

ワークシート2「クエスチョンシート」

ワークシート3「特集ページの掲載記事リスト」

ワークシート4「リフレクションシート」

インターネット接続が可能なデバイス（グループごとに1台以上）

○ワークシート 1

発信者は誰か	
発信されたのはいつか	
事実として書かれていることは	
解釈・意見として書かれていることは	
記事のねらいは何か	

○ワークシート2

記事への疑問

1	
2	
3	

記事を読んだ自分の考え

--

○自分の考えへの疑問をふまえた自分の考え②

--

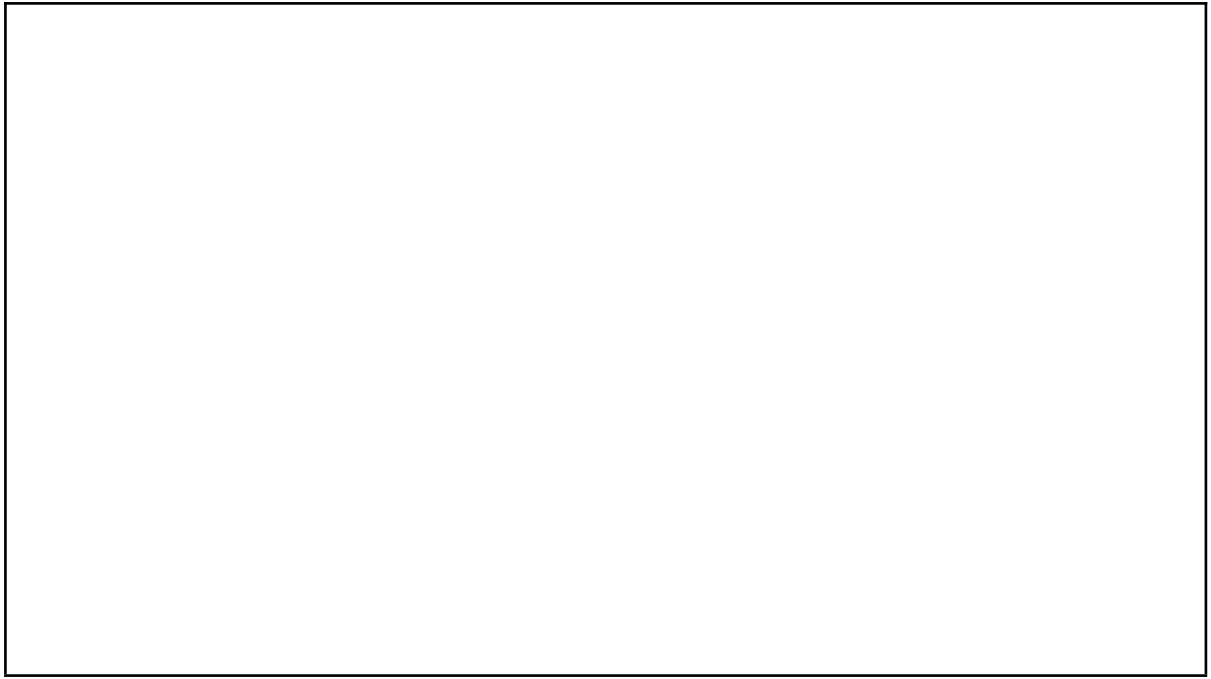
○ワークシート 3

特集タイトル

--

	タイトル	出典、日時	選んだ理由、視点	アドレス
メイン記事				
1				
2				
3				
4				
5				

--	--



○ワークシート4

1 今回の学び	
2 上手くできたこと	
3 改善点	
4 今後の応用	

第4章 形成的評価と改善（未実施）

- 4. 1 内容領域専門家レビュー
- 4. 2 インストラクショナル・デザイン専門家レビュー
- 4. 3 ユーザーレビュー
- 4. 4 形成的評価

第5章 結果と考察

- 5. 1 考察
- 5. 2 今後の課題と展望

謝辞

参考文献

文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm（参照日：2024年11月22日）

文部科学省（2018）高等学校学習指導要領解説.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm（参照日：2024年11月22日）

菊池聡（2023）より良い思考の技法：クリティカル・シンキングへの招待.

放送大学教育振興会，20 - 28

耳塚佳代（2020）「フェイクニュース」時代におけるメディアリテラシー教育のあり方. 社会情報学，8（3）：29.

鈴木みどり（1997）メディア・リテラシーを学ぶ人のために. 世界思想社，5－9

Len Masterman（1995）"Media Education：Eighteen Basic Principles", MEDIACY, vol. 17, No. 3, Association for Media Literacy, 1995. (宮崎寿子・鈴木みどり訳, 1999)

中橋雄（2014）メディア・リテラシー論：ソーシャルメディア時代のメディア教育. 北樹出版，53

Ennis, R. H. (1987) "A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities." In J. B. Baron & R. J. Sternberg (Eds.) *Teaching thinking skills: Theory and practice*/WH Freeman and Company .

楠見孝・道田泰司編（2015）批判的思考 21世紀を生き抜くリテラシーの基盤. 新曜社，19
坂本旬，山脇岳志（2022）メディアリテラシー 吟味思考を育む，時事通信社72 - 94

日本新聞協会（2000）新聞倫理綱領<https://www.pressnet.or.jp/outline/ethics/>
（参照日：2024年12月30日）

NIE公式ホームページ（2024）<https://nie.jp/>（参照日2024年11月17日）

二田貴広（2023）全国紙と地方紙の比較から育成する「メディアリテラシー」. メディア情報リテラシー研究，第4巻第1号

東京都立高等学校学校司書会（2018）都立高校の生徒のためのラーニングスキルガイド～レポート作成編～https://www.sisyokai.net/activity_guide.html（2024年12月30日）

坂本旬（2021）偽情報・陰謀論時代のオンライン情報評価と多元的リテラシーとしてのメディア・リテラシー. 法政大学キャリアデザイン学部紀要18号

角屋重樹監修、広島大学附属福山中・高等学校（2002）教科とリンクする『総合的な学習』のデザインと評価. 東洋館出版社121 - 130

加藤尚裕（2008）メタ認知ツールとしてのコンフリクトシートの利用に関する試み：小学校第5学年「おもりの働き」の授業を事例として. 理科教育学研究Vol148 Mo3

松田雅代、溝邊和成（2022）は認知的表現ツールに見られる概念変容とメタ認知の特徴—Cognition Mapに表れる言語・非言語の分析より—. 日本教科教育学会誌第45巻第1号 pp22－35

木下博義、中山貴司、山中真悟（2014）小学生の批判的思考を育成するための理科学習指導に関する研究—クエスチョン・バーガーシートを用いた実践を例にして—. 理科教育学研究. Vol155 No3

Center for News Literacy (2024) What is News Literacy?

<https://centerfornewsliteracy.org/what-is-news-literacy/> (参照日: 2024年11月22日)

楠見孝、村瀬公胤、武田明典 (2016) 小学校高学年・中学生の批判的思考態度の測定－認知的熟慮性－衝動性、認知された学習コンピテンス、教育プログラムとの関係－日本教育工学会論文誌 40(1), 33-44